

詩篇1-5篇「主に身を避ける人」

1A 主の教えを喜びとする者 1

1B 幸いな人 1-3

2B 悪者の道 4-6

2A 御座におられる方の笑い 2

1B 騒ぎ出す国々 1-3

2B 神が立てられる王 4-9

2B 御子への口づけ 10-12

3A 取り囲む盾 3

1B 立ち向かう敵ども 1-4

2B 身を横たえる支え 5-8

4A 聖徒への特別な扱い 4

1B 苦しみの時のゆとり 1-5

2B 御顔の光 6-8

5A 朝焼けの祈り 5

1B 切なる嘆願 1-3

2B 偽りを言う口 4-10

3B 大盾で守られる者たち 11-12

本文

私たちは、ヨブ記に引き続き、旧約聖書の中で「詩歌」と呼ばれる書物の二冊目を学びます。詩篇です。ヨブ記と詩篇は、同じ主題が貫かれています。それは「苦しみの中の嘆き」であります。ヨブ記においては、その苦しみを神の義に照らして、どうしてなのか？という疑問として、議論という形で話が進んでいきましたが、詩篇は苦しみの気持ちを主に嘆きの中に言い表す、というところに特徴があります。苦しみの中で嘆きますが、その中で主が祈りに答えてくださり、状況はたとえ変わってなくても、主との関係の中で喜びと賛美に変えられます。ある注解書には、詩篇の主題は、「嘆きから賛美へ」と付いていました。

詩篇は百五十もの詩によって成り立っています。これから読んでいのに多くの時間を裂きますが、その間に、私たちの教会が、一人一人が、祈りと賛美による回復が与えられることを願います。これまで自分が何かすることによって、主の目的を果たそうとしているところから、自分が主の前に留まることによって、主が自分を通して何かを行ってくださるように変わることです。

これら数々の詩は、賛美の歌として神に捧げられたものであります。ヘブル語の題名は、テヒリム「たたえの歌」という意味です。ですから、朗読して学んでいくことも大切ですが、それ以上に

賛美の中に取り入れ、また祈りの中に取り入れていくことが大いに助けになります。新約聖書で、福音書の中でイエス様が詩篇を使って賛美を歌われているところがあります。「そして、賛美の歌を歌ってから、みなオリーブ山へ出かけて行った。(マタイ 26:30)」過越の食事の時に、ユダヤ人はハレルの歌と言って、詩篇 113 から 118 篇までを歌います。これをイエス様が歌われました。

そして初代教会に対して、パウロは、「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(コロサイ 3:16)」と言いました。私たちは午後礼拝の後で、交わりと祈りの時を持っていますが、そのような時に言葉によって教えたり、戒めたりすることも有益ですが、詩篇を使って、または賛美の歌を使って神に向かって歌うことも、とても有益ではないかと思います。これら霊的な詩を体の中に沁みこませることは素晴らしいです。

詩篇が編纂された背景を知ることは、理解への大きな助けになります。神が、賛美による礼拝を受けられるようになるのは、ダビデの時代であります。私たちは歴代誌の学びで、ダビデがモーセの幕屋には無かった、賛美や歌うたいをレビ人らに任せ、それを行なうように命令したところを読みました。そして、ダビデの死後も、レビ人の賛美による奉仕によって、例えばヨシャパテ王は彼らを戦いの最前線において、それで主が敵に打ち勝つように、神に信頼したのです。ダビデが賛美の奉仕を導入するまでは、モーセに神が命じられた幕屋において動物のいけにえを捧げることが、主なる神への礼拝の主な活動でした。けれども、ダビデが主の御霊に動かされて、彼がこよなく主への賛美を愛し、主の前で歌い、主の前で踊ることを人生の中で情熱となっていました。その彼の姿を表す典型的な出来事が、神の箱をエルサレムに運ぶ時であります。彼は、歓声を上げて、主の箱の前で喜び踊りながら、ダビデの町、エルサレムに入りました。

ですから、ダビデが、シオンと呼ばれる自然要害に、神の箱を置き、そこで主を礼拝したことによって、シオンにこそ主がおられ、王として君臨しておられるという信仰を持ちました。そこで詩篇には、シオンにおいて神が王としておられるという発言を数多く読みます。今の時代であれば、御霊が住んでおられる教会、そして後の時代であれば、主が再臨されて文字通り、シオンにて王として君臨し、千年後に天からのエルサレムにて神を礼拝し、神に仕えることになります。私たちが、教会として集まり、そこで主にお会いすることをこよなく愛しておられるでしょうか？また、天の望み、神が御座を持っておられるところを憧れているでしょうか？それが、シオンへの慕い求めにつながります。

そして、詩篇は主にダビデによって歌われたものによって成り立っていますが、これらが編纂されたのはバビロン捕囚以後であります。ですから、歴代誌がバビロン捕囚以後の帰還の民によって編纂されたのと同じように、詩篇も帰還の民によって、今のように編纂されました。ですから、学者エズラや、その時代の祭司やレビ人が編纂に関わったと考えていただければいいです。そこにいる彼らは、外国の民に囲まれていて圧迫を受けていました。それは偏に、主に背を向けて、主

の掟を守らなかったから、ということがありました。それで、主の言葉に立ち返り、御言葉への献身によって、外からの圧迫から救い出されるのだ、という悔い改めが色濃く、詩篇には映し出されています。ダビデが、あらゆる苦しみと圧迫の中から救い出されたように、彼らも苦しみと圧迫の中から、ダビデと同じように主をこよなく愛し、主のみ仕えることによって救い出されるのだ、という強い願いがありました。

ところで、詩篇は五つの巻があります。第一巻、第二巻、そして第五巻まであります。これは、おそらくモーセ五書を意識しているのだと思われます。モーセの律法に立ち戻る思いを込めて、詩篇も五つに区分したのではないかとされています。

1A 主の教えを喜びとする者 1

詩篇第一篇また二篇は、詩篇全体の前置きになっている詩です。詩篇全体に貫かれているテーマを持っています。

1B 幸いな人 1-3

1 第一巻 1:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。1:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。1:3 その人は、水路のそばに植わった木ようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。

「幸いなことよ。」という言葉から始まります。イエス様も、「心の貧しい者は幸いである。」という、幸いから山上の垂訓を始めました。興味深いことに、詩篇にある、そして福音書にある「幸い」というのは、「人」に向けられており、周りの状況に向けられていません。私たちは幸いを感じる時に、自分を取り巻く環境によって感じるのですが、聖書は一貫して、その人が主とのつながりによって幸いであると教えています。それは、第一篇では、「主のおしえを喜び」とする人です。

主の教えを喜びとする人が幸いなのですが、その前に、「これこれをしていない人」として対比しています。三つありますね、悪者、罪人、そして嘲る者です。悪いことを心で企んでいます。それから、心にあることを行動に移します。つまり罪人がその道に立ちます。そして罪を行なうだけでなく、善を行なう者を嘲けるところに留まります。こうした悪の道避けて、主の教えを喜びとします。ダビデが敵に囲まれていたこと、バビロン捕囚以後の帰還の民が外敵に囲まれていたことを思ってください。それが霊的にも、日常生活で私たちが受けている苦しみです。悪者のはかりごと、罪人の道、そしてあざける者の着ている座があります。これら避けます。

そして、主の教えを「喜び」としますが、第百十九篇が聖書の中で最も長い章ですが、それは各節に一つも漏らさず、主の仰せ、定め、言葉、戒め等、主の言葉を慕い求める言葉になっています。主の教えを強制されてではなく、自ら求める人のことです。

そして、主の教えを喜びとする時に、「そのおしえを口ずさむ」とあります。これは、思い巡らして、口にも出していくことです。御言葉を読む時に、注意して読みます。立ち止まって、主に尋ね求めながらそこに書かれていることが何を意味しているのかを求めます。他の同じ言葉が書かれている箇所も開いてみます。そして、その過程で与えられた思いを語り出します。そして、歌ってみます。こうしたことをするのが、「口ずさむ」という言葉の中に入っています。そして「昼も夜も」とありますが、それを絶え間なく続けることです。それで私たちは、礼拝の後に分かち合いをしていただいています。能動的に御言葉に取り組みます。そして、日曜日だけでなく日頃から主の言葉を思い巡らし、それを祈りの中で口に出し、また互いの交わりの中で話していきます。

すると、約束があります。「水路のそばに植わった木のようだ。」とあります。この木は、ナツメヤシの木ではないかと言われています。イスラエルに行かれた方はご存知ですが、ガリラヤ湖から死海に南下していくと、死海に近づき荒野を通るとそこに、ナツメヤシの木々が植えられています。ナツメヤシに限らず、この地域の木々は自然に育つことはなく、植樹しなければいけません。そして、そこまで水路を引いていきます。そのため、どんなに乾燥した気候でも、根を下ろして頑強な木として成長して、多くの実を結ぶことができます。

これが、神の所有の民となった者たちの姿です。ローマ 11 章では、異邦人のキリスト者は野生のオリーブの木であったが、栽培種のオリーブ、すなわちイスラエルに接ぎ木されたたとあります。イスラエルは植えられた木であり、イエス・キリストを信じる異邦人も、接ぎ木された者です。私たちは、何となく生活していて、それでキリスト者として育つことはありません。はっきりと、自分が主によって、その水路のところに植えられたのです。水によるバプテスマも、はっきりとした信仰表明であり、神によって植えられた木であることを証しています。「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」

続けて約束は、「時が来ると実がなり、その葉は枯れない。」とあります。時が来ると、というのが大事です。ナツメヤシの場合は、四十年の歳月を費やしてようやく実が結ばれます。そして、実が結ばれると百五十年にも渡って結実を続けるのだそうです。¹私たちキリスト者の成長が、このような堅実なものであることを知る必要がありますね。「しかし、良い地に落ちるとは、こう言う人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。(ルカ 8:15)」

さらに、「何をしても栄える」とあります。モーセの後継者、ヨシュアがその約束を受けましたね(ヨシュア 1:8-9)。私たちが主と共にいて、主と交わっている生活を送るのであれば、その時々々に決めていくこと、選択していくことは、栄えます。主の御心は占いのようではありません。この道を選ぶか、あの道を選ぶか、もちろん私たちは立ちどまって、主の知恵をいただかなければいけま

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E6%81%A9%E5%AF%B5%E7%94%A8%E8%AA%9EPs1>

せん。ダビデは絶えず、ペリシテ人と戦う時にこれが御心なのかどうか、主に伺いを立てました。けれども、主の御霊をいただいているのですから、信仰によって主に対して正しい心を持っているのであれば、その歩む道に自信が持てます。例えば、今から礼拝後に自動販売機でジュースを買いにいって、どの自動販売機に行けばよいのか、御心を探るでしょうか？どちらでも良いのです！けれども、主との交わりを持っていると、例えばそこに通りかかった人が、実は神が教会に導こうとされていた人であったりするので。

2B 悪者の道 4-6

1:4 悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。1:5 それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。1:6 まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

水路に植えられた木とは対比的に、悪者は風が吹き飛ばすもみ殻となります。神の裁きの火の中に入れられるのです。悪者は、第一に「さばきの中に立ちおおせ」ません。最後の審判の時に、火と硫黄の池に投げ込まれます。そして、第二に「正しい者のつどいに立て」ません。天にある大きな群集の中には入れないのです。交わりから切り離されます。そして主は、「正しい者の道を知っておられる」とありますが、親しく知っておられるということです。けれども悪者の道は滅びます。

このようにして、正しい者と悪者の対比がこれからの詩の中で数多く出てきます。箴言においても、これは続きます。このことによって、私たちが主のみに拠り頼み、主のみに仕えることが何であるかを明白にしていくのです。

2A 御座におられる方の笑い 2

第二篇は、第一篇の一つにつながっていたのではないとも言われる詩歌です。これもまた、これからの詩篇の大きな流れを作っている詩歌であります。そして第二篇は、これから数多く出てくるメシヤ詩篇、すなわちキリストを預言する詩篇の初めでもあります。

1B 騒ぎ出す国々 1-3

2:1 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。2:2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者にと逆らう。2:3 「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」

詩篇の背景を思い出してください。ダビデが戦って、国々を制圧していく歴史を私たちはサムエル記と歴代誌で読みます。相集まって挑みかかってくる、シリアとアモン、モアブやエドム、ペリシテ人らの姿を見ます。また、バビロン捕囚以後の帰還の民も外敵に囲まれていました。そうした彼らの背後のある動機は、第一篇に書かれていた悪者たちと同じです。主を神として認めないのです。主の御言葉という枷を振り払おうとしているのです。

しかし、私たちはこの世の騒ぎに加担しません。私たちは、キリストの枷を負っているからです。人が高ぶり、自分の考えや自分の力で生きていこうとしている中で、キリストのくびきを負っている者たちは、ただキリストにあって愚かな者となり、この方の命令に従うだけです。その命令とは何でしょうか？「愛しなさい」という命令です。この命令は重荷とはならないと、ヨハネ第一 5 章 3 節にあります。イエス様の頸木は軽いのです。この方に自分の主導権を任せた人は、その方の命令を守ることは苦になるどころか、むしろ騒がしい世において、その渦中で安息を得ることができます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」

なぜ、国々が騒ぎ立つのか？それは「主と油注がれた者に逆らう」とありますが、油注がれた者とは神が選ばれた方、神が世界の王として任命された方、キリストが王として君臨される時が近づいているからです。主権者が近づいているから、これまで自分が支配していると思っていた者たちが騒ぎはじめます。キリストが初めに来られた時、そこはローマ帝国でした。ヘロデがユダヤ人の王として治めている時代でした。キリストを十字架に付ける時、ローマ総督ピラトとヘロデ・アンティパスは敵であったのに、その時は仲良くなりました(ルカ 23:12)。それぞれが敵であっても、神とキリストに逆らうことにおいては共通しているので、仲間になることができます。

そして主が再臨される時に、このことが起こります。国々が騒いでいます。なぜなら、主イエスが王として戻ってこられる時が近づいているからです。世界が、神が前もって語られたとおりに動いています。ユダヤ人が世界中からかの地に戻ってきています。イスラエルの国が建てられました。世界中で、福音が伝えられています。これまでにない数多くの人々が、イエスを自分の主キリストとして受け入れています。神がご自分の秩序を取り戻すべく、動き始めておられるのです。今でこそ、国は国に敵対し、民は民に敵対していますが、やがて神とキリストに逆らうために相集まることになるのです。黙示録 16 章には、終わりの日に世界の王たちが、その軍隊がイスラエルのメギドの丘、ハルマゲドンに集まることを、主は予め語っておられます。

2B 神が立てられる王 4-9

2:4 天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。2:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。2:6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」

ここには、神のユーモアがあります。国々の王たちは、最新兵器をもってキリストに立ち向かおうとしているわけですが、それに対して天の御座に着いておられる方は笑っておられて、嘲られています。私たちが天からの余裕が与えられているのは、ここに 있습니다。私たちはキリストにあって、天につながられている者たちです。ですから、地上で起こっていることを見れば息苦しくなるのですが、天の御座におられる方の視点で眺めれば、滑稽にさえ思える姿であると認めることができ、物ともしない、動じないのです。ここから私たちは、心の余裕が生まれるのです。たとえ世が騒々し

くなくても、神が王であり、すべてを仕切っておられるのです。

そして主が語られるのは、シオンにキリストを王として立てたという宣言です。これは、エルサレムにキリストが戻ってこられて、そこから地の果て果てまで王として治められることを示しています。シオンが「聖なる山」と呼ばれているのは、聖なる方がそこにお住まいだからです。

2:7 「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。2:8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。2:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」

主なる神は、油注がれた者、シオンから王として治める者として、ご自分の御子を選びました。ここは、御子が語られている部分です。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と父なる神が言われたということです。これは、イエスがベツレヘムで生まれたことを意味していません。イエスは、ベツレヘムで肉体を取られる前から存在しておられました。実に、天地が創造される前から存在しておられ、永遠の昔からおられました。この方が人の誕生のように誕生したことはありません。

この表現の意味するところは、神がイエスを復活されたことです。使徒パウロが、この箇所を取り上げてイエスの復活に当てはめました。「神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。』と書いてあるとおりです。(使徒 13:33)」つまり、イエスが確かに神の子であることを公に示すことを意味しています。復活によって、この方が単なる人ではなく天地創造された方の御子であり、創造主ご自身であることを示しているのです。

そして、この復活の主がこの世界を隅々まで支配するように、父なる神は定められました。その時にキリストは、国々を鉄の杖で打ち砕くように、粉々にするとあります。杖は羊飼いの杖であり、治めることを意味します。そして鉄は、武力のことです。力を行使して、これら王たちを抑えつけるということです。

2B 御子への口づけ 10-12

2:10 それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。2:11 恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。2:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

王たちが、このように粉々に砕かれないうちに主は呼びかけておられます、「慎め」と。今、私たちに必要なのは慎み深さです。ヨブ記でこれを私たちはじっくり知りました。たとえ自分には理解で

きないことが起こっても、神のご計画に自分の魂を任せる必要があるということです。そして、「恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。」とあります。キリストが来られた後の神の国において、王たちが仕えます。けれども今からでも、全ての人に対して神に対する畏敬をもって仕えなさい、と呼びかけています。主に仕えることは喜ばしいことです。主を畏れかしこみつつ仕える時に、私たちの心には喜びがあります。

そして、「御子に口づけせよ。」と言われます。口づけするのは、相手を王として屈服する姿であります。王子に対して、服するのです。すべての者が、イエスが主であると告白する時が来ます。けれども、もしそれを行わなければ主の怒りがあり、その道は滅ぼされてしまいます。

最後に、「幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」とあります。再び、「幸いな人よ」との呼びかけです。ここでは、「身を避ける」ことが幸いだということです。私たちに与えられる幸福の根底には、二種類あります。一つは生存の糧が与えられている保障です。もう一つは、外敵から守られているという安心感、保障であります。生きる糧が与えられていることについては、「水路に植わった木」とありました。イエス様が、「わたしが命のパンです。」と言われたように、私たちはこの方によって生かされているという幸いがあります。

次に、ここです。主が私をあらゆる外敵から守っておられるという保障です。霊の戦いの中に神の民は置かれています。私たちは世を甘く見てはいけません。あらゆる形をもって、ちょうど国々が相集まって神とキリストに逆らうように、神の民に対して四方から敵が攻め込んでいます。その時に私たちが、いかに主が自分を守る方なのかを熟知している人はゆっくりとしていられるのです。

3A 取り囲む盾 3

ですから第一篇において、正しい者と悪者という区別があり、第二篇に、主なる神が王となっておられるという守りがあることが分かりました。第三篇は、この具体的な適用をダビデが行っている部分を読みます。

1B 立ち向かう敵ども 1-4

3 ダビデがその子アブシャロムからのがれたときの賛歌 3:1 主よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。3:2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない。」と。セラ

ダビデがアブシャロムから逃れている時に歌っているものです。アブシャロムがヘブロンで王と宣言しました。父ダビデは、エルサレムを、血を流す町にたくないなので、エルサレムから逃げてきました。その時の彼の心を歌ったものです。敵が増えてきて、自分に立ち向かう者が多くいて、その声は、「彼には神の救いはない」というものであります。先ほどの、国々が相集まって、神とキリストに立ち向かうのに似ていますね。しかし、ダビデは大胆に告白します。

3:3 しかし、主よ。あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です。

「しかし」という言葉が出てきたら、聖書では気をつけてください。対比しています。ここでダビデは大切なことをしています。信仰告白をしているのです。主が、自分を取り囲む盾であり、私の栄光であり、私のかしらを高く上げる方であると。主がどのような方であるかを明確に、口をもって言い表し、かつその神は私の神であると、個人的に適用するのです。私たちの信仰は曖昧なものではありません、ふわっとした気持ちでもなく、びびっときたひらめきでもなく、このように明確に、言葉をもって告白できる力なのです。

先ほど、「私は主に身を避ける」と言っていました、ここでそれが「盾」という表現になっています。自分を守り、自分を保護してください。それから、「私の栄光」と言っています。ダビデは今、貶められています。彼の王としての栄光が消えています。しかし主こそ、私の栄光だと告白しています。私たちは栄光をどこに求めているのでしょうか？人からでしょうか、いいえ、主からの栄光を求めていますね。そして、「私のかしらを高く上げてくださる方」とあります。ダビデは頭をもたげているに違いありません。もうダビデの時代は終わったと落胆していたのかもしれませんが、しかし、主が頭を高く上げてくださると告白しています。自分が自分で引き上げるのではなく、主が引き上げてくださるのです。

3:4 私は声をあげて、主に呼ばれる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。セラ

ダビデは、主を呼んでいます。声をあげて、呼んでいます。この行為も大切です、口をもって、主の名を呼び求めるのです。主は快く、答えてくださるのです。しかも、「聖なる山」すなわちシオンから答えてくださいます。主が住まわれる所から必ず答えてくださるのです。私たちの主は今、神の右の座におられます。主イエスの名を求めれば、そこから答えてくださいます。

そして「セラ」という言葉があります。これは安息と言う意味ですが、一呼吸置くような意味で詩篇にでてきます。沈黙を少しだけ作ることによって、むしろ主の心が自分の心の中に振動するのです。

2B 身を横たえる支え 5-8

主が答えてくださったことによって、ダビデにとてつもない余裕が生まれます。

3:5 私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから。3:6 私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。

身を横たえて眠っている姿、また目を覚ましている姿は、本当に安楽している姿であります。その理由は主が支えておられるという確信です。外では幾万の民が彼を取り囲んでいるのです。そ

れでも、ぐっすりと眠れるほどのゆとりがあります。エリシャがかつて、シリヤ軍に取り囲まれた時、そのシリヤ軍を火の戦車や火の馬が取り囲んでいたのと同じです。

3:7 主よ。立ち上がってください。私の神。私をお救いください。あなたは私のすべての敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いてくださいます。3:8 救いは主にあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように。セラ

第二篇で、王たるキリストが人間の王どもを粉々に砕くことを宣言してありました。同じように今、ダビデの敵どもの力をへし折ってくださることを、「悪者の歯を打ち砕く」として表現しています。ここで大事なのは、主がこれらのことを行なってくださるのです。敵の頬を打つのは相手への侮辱行為ですが、それも主が行ってくださいます。ここで思い出すのが、イエス様の命令です。「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。(マタイ 5:39)」この命令とダビデが祈っていることは矛盾しているのでしょうか？いいえ、むしろ一貫しています。ダビデは、相手に仕返しをしないのです。右の頬を打つようなアブシャロムに対して、彼は左の頬も向けるようにして対決せず、逃げていきました。しかし主に対して、敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕くように願っています。復讐を主に任せているのです、ですから実際のアブシャロムや彼にくみする者たちには、柔らかに接することができます。

2 節で敵どもは、「彼に神の救いはない」と言いましたが、ダビデは、「救いは主にある」と言い返します。自分で自分を救おうとしていません。主が自分を救ってくださいます。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。(マルコ 8:35)」最後に、「祝福があなたの民に」とあります。神の所有の民になっている者だからこそ、祝福があります。キリストにつながれているからこそ、天にある霊的祝福にあずかれます。

4A 聖徒への特別な扱い 4

そして第四篇は、第三篇の続きです。主にあるゆとりを、世からの圧迫によって主ではないところに求めていく誘惑と戦っている姿です。

1B 苦しみの時のゆとり 1-5

4 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデの賛歌 4:1 私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。4:2 人の子たちよ。いつまでわたしの栄光をはずかしめ、むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求めるのか。セラ 4:3 知れ。主は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。4:4 恐れおののけ。そして罪を犯すな。床の上で自分の心に語り、静まれ。セラ 4:5 義のいけにえをささげ、主に投げ頼め。

苦しみの時のゆとりを与えられる神ですが、午前礼拝でも話しましたように、ダビデは今、「義な

る神」に抛り頼んでいます。自分を義と認めてくださる方、恵みによって認めてくださる方がおられるということで、世的なものを慕い求めていく誘惑を退けています。続けて、「ご自分の聖徒を特別に扱われる」と言いました。ここでも、主がこよなく、一方的に愛しておられることを強く宣言しています。そして自分自身に対して、罪を犯さないように、主とのこの正しい関係に抛り頼むようにと言いついて聞かせています。

敵は私たちに罪を犯させるべく、誘惑していきますが、どこを疑わせるかと言いますと、主が良くしてくださっていることを疑わせます。エバが悪魔に惑わされたのもそれが原因です。世の友になってしまうのは、神がねたむほどに自分を慕っておられることを忘れてしまっているからです(ヤコブ 4:5)。

2B 御顔の光 6-8

4:6 多くの者は言っています。「だれかわれわれに良い目を見せてくれないものか。」主よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。4:7 あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。4:8 平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

世は、何か良いことはないか、どこに良いことがあるのかと自己追及をさせようと仕向けます。しかしダビデは、主の御顔こそが良いことであると告白します。それを求めると、心に満足がきて、喜びが与えられます。それは物によって満たされる以上のものです。そして平安のうちに身を横たえて、眠りにつくことができるのです。第三篇と同じです。

5A 朝焼けの祈り 5

次に、第五篇は、敵による待ち伏せと取り囲みが、さらに激しくなっているダビデの姿を見ます。ここでダビデの祈りは「嘆願」になります。

1B 切なる嘆願 1-3

5 指揮者のために。フルートに合わせて。ダビデの賛歌 5:1 私の言うことを耳に入れてください。主よ。私のうめきを聞き取ってください。5:2 私の叫びの声を心に留めてください。私の王、私の神。私はあなたに祈っています。5:3 主よ。朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします。

願い出ていく様子をここで伺えます。初めは、「言うことを耳に入れてください」、次に「うめきを聞き取ってください」、それから「叫びの声を心に留めてください」です。普通に話し、次にうめきました、そして叫んでもいます。ところで、呻く時にローマ 8 章によれば、御霊がその弱さを助けてくださるとあります。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのた

めにとりなしてください。(26 節)」私はしばしば、主に語るだけで終わってしまうことが多いです。しかし、言葉にならない呻きがまだ残っています。御霊の助けを得て、時には異言の賜物を用いてそのうめきを主に聞き取っていただかなければいけません。

そして、叫びもあります。天に突き抜けるような叫びの祈りを捧げたことがあるでしょうか？叫ばないで黙ってしまっているのは、不信仰の表れでもあります。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをさせていただきます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。(ルカ 18:7-8)」主が聞いてくださるのに、それを信じられないで呼び求めていることがあるのです。

そして第五篇で特徴的なのは、主のところに向かうのが朝焼けだということです。朝早く起きて、主に対して心備えをします。これを主ご自身が行っておりました。「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。(マルコ 1:35)」自分ではどうしようもできない事गराについて、その心の呻きを主の前に持っていくのです。朝に起きることによって、このことができます。

2B 偽りを言う口 4-10

5:4 あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわざい、あなたとともに住まないからです。5:5 誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行なうすべての者を憎まれます。5:6 あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。主は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます。5:7 しかし、私は、豊かな恵みによって、あなたの家に行き、あなたを恐れつつ、あなたの聖なる宮に向かってひれ伏します。

ダビデが受けていた攻撃は、偽りを言う口です。中傷の言葉です。これに対して、彼は呻き、そして叫んでいたのです。私たちは、こうした声、世から来る声、悪魔や悪霊どもの放つ声を絶えず聞いています。それによって、圧力がのしかかってきます。

そこでダビデが抛り頼んだのは、「豊かな恵み」であります。彼の行なった功績ではありません。もっぱら神が彼のために一方的にしてくださったことにしたがって、神の一方的な好意によって神に近づいています。これが、偽りの口を封じるための武器であります。そしてダビデは、主の家に行っています。もちろん、この時に神殿はありません。しかし、神の箱はあります。主がおられるところに行き、そしてひれ伏す、礼拝するのです。私たちもこのようにして、主の前に礼拝に来ています。これが、霊の戦いの勝つ方法です。主の前に降参することです、主に自分の意志を明け渡すことです、ヨブが主の前にひれ伏した時に、サタンが逃げ去りました。

5:8 主よ。私を待ち伏せている者がおりますから、あなたの義によって私を導いてください。私の

前に、あなたの道をまっすぐにしてください。5:9 彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。5:10 神よ。彼らを罪に定めてください。彼らがおのれのはかりごとで倒れますように。彼らのはなはだしいそむきのゆえに彼らを追い散らしてください。彼らはあなたに逆らうからです。

ダビデは再び、戦っています。偽りをいう口は彼に追い迫ってきます。それで再びダビデは、「あなたの義によって」と言っています。自分自身の義ではなく、神ご自身の義によって導いてくださいと言っています。いかに神の義に拠り頼むことが大切でしょうか？私たちはどうしても、誰が正しいのか、何が正しいのか、と言って、神以外のものに正しさを見出そうとします。そこにサタンがつけ入ります。人間には正しさはないからです。しかし、私たちがひれ伏して、ただ神のみを義とする時に、その義が私たちの盾となってくださるのです。

その口がいかに破滅的か、ダビデが述べています。ここの箇所は、ローマ 3 章で引用されており、善を行なう者はひとりもない、と書かれているところに引用されています。その口はただ人を貶めるためだけにあります。「しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじつとしていない悪であり、死の毒に満ちています。(ヤコブ 3:8)」そしてダビデは、再び、これらの悪に対して罪定めをしてほしいと、復讐を主に任せています。

3B 大盾で守られる者たち 11-12

5:11 こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってください、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。5:12 主よ。まことに、あなたは正しい者を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。

すばらしいです、この戦いの中でダビデは勝利しました。朝の祈りと、そして礼拝に出てくることによって勝利しました。ダビデが行っていたのは「身を避ける」、自分が安心していることができる二つの要素、生存の保障と防衛の保障の後者のほうです。そして再び、喜びが戻ってきて、喜び歌っています。キリスト者の特権は、喜びです。それは状況に拠るのではなく、主に身を避ける、つまり主との関係の中で出てくるものです。

そして主を愛し、また主に愛される宣言をしています。御名を愛しています。心から主を愛していることを唱えています。そして主が、その正しい者を祝福して、今度は愛によって彼を取り囲まれます。その愛こそが、敵の偽りの舌に対する最大の盾となるのです。パウロが、告白しました。「2 コリント 5:14 というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。」パウロは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいると言いました。そして、その愛はキリストが死なれたところに現れています。私たちが見ることのできる愛は、キリストの死にあり、神の義もキリストの死にあり、神の恵みもキリストが対価を支払って、私たちが無償でそれを受けられところにあります。